

小児期の行動（変容）と成人病の関連を調査研究する長期
コホートの必要性、およびその維持、運営に関する検討
（分担研究：長期コホート調査研究の検討）

五十嵐正紘

要約：小児期の本人、本人を取り巻く家族、友人、教師、地域社会が持つ健康行動
ないし健康信念、またはその変容を狙った介入の有無、などの特徴によって本人
を区分けした上で、長期追跡調査し、成人病ないしその危険因子の発生率を
検討する地域コホートを維持運営する上でのノウハウの検討を行った。

見出し語：小児期からの成人病予防、行動変容、コホート研究、コホートの維持運営

1 緒言

成人病を見据えた小児医療
内科を知っている小児科医

2 小児期の行動（変容）の将来の成人病予防に対する重要性

- A 小児期の行動（変容）の成人期の習慣への影響
生活習慣の基礎が作られる時期
お袋の味、三つ子の魂百まで
容易に習慣変更しやすい時期
親とくに母親の行動変容の必要性
地域の健康信念の個人習慣の保守への影響

遺伝、発達等の避け難い因子ではなく、環境因子の関与分は予防が可能

- B 成人へのtrackingの程度

- C 行動変容の効果を見るには、
観察コホートだけでなく、介入コホート（実験研究）が必要
介入試験の倫理性

自治医科大学地域医療学

Department of community and family medicine, Jichi Medical School

3 長期コホート調査・研究の必要性と視点

A コホート研究の利点

1. コホート研究の利点は、集団を随分追跡して、その発生原因の追跡が容易である。

2. コホート研究の利点は、最も危険な状態から、比較的無害な状態まで、観察が容易である。

3. 事例対照研究は、研究の目的が、特定の疾患の発生原因を明らかにすることである。コホート研究は、特定の疾患の発生率を明らかにすることである。コホート研究は、疾患の発生率を明らかにすることである。コホート研究は、疾患の発生率を明らかにすることである。

B コホート研究の欠点

コホート研究の欠点は、費用がかかる、観察期間が長い、脱落が多い、追跡が困難である、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い。

コホート研究の欠点は、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い。

C 欠点

1. 小児コホート研究の欠点は、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い。

2. 小児コホート研究の欠点は、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い。

3. 日本での研究の必要性は、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い。

D コホート研究の利点

コホート研究の利点は、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い、観察期間が長い、結果の解釈が難しい、バイアスの可能性が高い。

ハ. 内容に対する相互理解によるデータの質の向上のために

1) 対等なデータの交換

データ解析者、疫学者、統計学者が、現場に足を運ぶこと、双方向の対話、相互理解の重要性、疫学指向の医師と統計学者がいる

フィールドワーク、側面からのアプローチ、大学のノウハウ、機器を提供する形、発表者になる、地域医療計画立案に役立てられる

2) 診断のクライテリアの標準化と衆知

2. コホート研究以外の結び付きによる関係強化

現場の担当者、大学の教員になる、期待と地元医療の向上、保健活動

診療技術的支援、調査事務完全、核となる医療機関に医師、看護婦、検査技師、医事係、クリニックの円滑な運営と、データの正確で

3. コホート一病気の施設と大気

小地域観察が出来る、経過が受けやすい、あが病気が受けやすい

4. コホート個人他家族ラ定期新検

兄弟の集積、育成、調査を続けることも長期維持に大事、兄弟もやってくれる可能性が高い、これら調査を続けることも長期維持に大事

E. データ解析期間の違いの補正、死亡率の違ひ、新人者の違ひ

person-years、発症の危険が年々高くなる、この仮定の妥当性を、各調査で検討する必要がある

5 長期コホート調査・研究の予測される成果、評価方法

A 成果

疫学調査の質のあるデータがあると、各危険因子の特徴を明かにできる

B 評価

1. 研究のデザインの評価期待しているか(仮設)の良し悪し
研究の開始者の割合

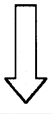
2. 原因結果の発生を評価もついでに直ちには原因結果の観察があるとは言えない
病気の公衆衛生に伴う予防因子の重大な結果の観察でなく観察に基づいている
病気にこれら原因と誤った結果を決定する場合的調査や事例対照研究に過ぎない研究

統計学的な関連を原因結果と解するか否かの基準

関連の強さ
時間関係
他の知識と矛盾しない
他の変量で因果関係が説明できない

dose-response relationship
幾つかの調査で同一結果が出る
特異性……1つまたは2、3の病気でしか関連がない

3. 危険因子がなく発症する人、危険因子がありながら発症しない人の研究



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:小児期の本人、本人を取り巻く家族、友人、教師、地域社会が持つ健康行動ないし健康信念、またはその変容を狙った介入の有無、などの特徴によって本人を区分けした上で、長期追跡調査し、成人病ないしその危険因子の発生率を検討する地域コホートを維持運営する上でのノウハウの検討を行った。